

ガザと私たちをつなぐ道

大学一般教育部 松本 周

²⁶さて、主の天使はフィリポに、「ここをたつて南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け」と言った。そこは寂しい道である。²⁷ フィリポはすぐ出かけて行った。折から、エチオピアの女王カンダケの高官で、女王の全財産の管理をしていたエチオピア人の宦官が、エルサレムに礼拝に来て、²⁸ 帰る途中であった。彼は、馬車に乗って預言者イザヤの書を朗読していた。

²⁹ すると、“霊”がフィリポに、「追いかけて、あの馬車と一緒に行け」と言った。³⁰ フィリポが走り寄ると、預言者イザヤの書を朗読しているのが聞こえたので、「読んでいることがお分かりになりますか」と言った。

³¹ 宦官は、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」と言い、馬車に乗ってそばに座るようにフィリポに頼んだ。³² 彼が朗読していた聖書の箇所はこれである。

「彼は、羊のように屠り場に引かれて行った。

毛を刈る者の前で黙している小羊のように、

口を開かない。

³³ 卑しめられて、その裁きも行われなかった。

だれが、その子孫について語れるだろう。

彼の命は地上から取り去られるからだ。」

³⁴ 宦官はフィリポに言った。「どうぞ教えてください。預言者は、だれについてこう言っているのでしょうか。自分についてですか。だれかほかの人についてですか。」³⁵ そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの箇所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた。³⁶ 道を進んで行くうちに、彼らは水のある所に来た。宦官は言った。「ここに水があります。洗礼を受けるのに、何か妨げがあるでしょうか。」

³⁸そして、車を止めさせた。フィリポと宦官は二人とも水の中に入って行き、フィリポは宦官に洗礼を授けた。³⁹彼らが水の中から上がると、主の霊がフィリポを連れ去った。宦官はもはやフィリポの姿を見なかったが、喜びにあふれて旅を続けた。

使徒言行録 8 章 26 節-39 節

今日の聖書箇所が登場する「ガザ」は、今を生きる私たちにとって深く重く心に響く地名です。物理的には遠く離れた私たちのところにも、ガザにおける痛ましい光景が映像で届きます。多くの建物そして街が破壊され、瓦礫となり、傷つき横たわる多くの人々がいます。激しい戦闘の中で、社会的弱者の立場に置かれることもたちがとりわけ深く傷ついていることに心を痛め、そしてこの光景が他ならぬ聖書の舞台の地で

起きていることにも深く心を痛めます。紛争当事者それぞれの背後には、宗教の存在があります。「アブラハムをそれぞれの祖とする宗教」「ヘブライ語聖書を共通の源泉とする啓典の民」が、この争いにおける双方当事者であることにも、同じ信仰の祖に連なるキリスト者として痛みを深く覚えます。

宮城学院女子大学では、本年発行された研究論文集 138 号の中で新免貢名誉教授が「聖書文学学会声明文をめぐる諸問題」との論文において、ガザの状況に言及し、平和構築へ向けたアカデミズムの役割について記しています。また、11 月 8 日にはキリスト教思想史研究者の安酸敏眞先生をお迎えして、「信仰と人道の間（はざま）で レッシング宗教哲学から学ぶ」と題して講演いただきます。

このように本学も含め、キリスト教界が注視し、祈り、何とか支援を届けたいと願っているガザの状況を心に留めながら、本日の教職員礼拝で聖書の語りかけを共に聞きたいと願います。今日の聖書箇所、使徒言行録 8 章 26 節で「さて、主の天使はフィリポに、『ここをたって南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け』と言った。そこは寂しい道である」とあります。ガザの道は、二千年前にあって「寂しい、さびれた」と形容されました。地中海に程近い町ガザは、古代の一時期は交易によって栄えました。時代の移り変わりとともにその賑わいが去った後、ガザへの道は寂れ廃れていきました。以前の聖書翻訳では、「このガザは、今は荒れはてている」と訳されていました。寂しい道、荒廃した場所、ガザの地へのこうした形容は、使徒言行録が書かれてから二千年近くの時を経た私たちにもまた、現在の状況と重ね合わせて悲しく、深く響きます。「寂しい、荒れ果てている」という言葉が、単に物理的建物や街の描写としてだけではなく、周辺の大国の政治的思惑や軍事力に翻弄され、虐げられて声を上げることさえできないでいる名もなき多くの人々の悲嘆と重なり合った言葉として聞こえてきます。

そして今日の聖書箇所には、遠くアフリカからエルサレム神殿へと礼拝に向かい、その帰路にある一人の旅人が登場します。旅人についてここに記されている情報からすれば、彼はわざわざ遠距離の旅をしたにもかかわらず、エルサレム神殿の敷地の中で神を礼拝することができなかったであろうと理解されます。彼がエルサレム神殿に入れなかった理由の一つは、イスラエル民族の血統でないということにありました。もう一つの理由は彼の宦官としての身体的手術が、当時の宗教規定によって神殿に立ち入るにふさわしくないとされたことによります。エチオピアにいて何らかの仕方で聖書を手にし、そこに記された神を信じるようになり、礼拝をしたいとはるかエルサレムまで旅をした。その彼にとってエルサレムからの帰路は失意に満ちていました。エルサレムからガザへ下る道は「寂しい道」であったとの聖書の記述は、この旅人の精神的内面的状態をも表現するものでした。

落胆しつつ、イザヤ書を読んでいる旅人に、イエスの弟子フィリポが声をかけます。フィリポに馬車と共に行くよう促したのは“霊”であるとあり、これは神ご自身である聖霊を表しています。またフィリポに、エルサレムからガザへと下る道へ行くよう言ったのは

「天使」であったと記されます。聖書に記される天使とは、神の使い・使者という意味ですから、必ずしも人間離れした存在を想定する必要はありません。フィリポは神である聖霊に導かれ、神の使者に促されて、イザヤ書を読む旅人へ声を掛けました。「読んでいることがお分かりになりますか」と。その問いかけに対して宦官は「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」と答えたと記されます。

旅人は聖書を手引きしてくれる人を求めています。聖書の言葉には真理があると信じたからこそ、心躍らせ、礼拝するためにエチオピアからエルサレムまで旅をしたのです。しかし旅人を待っていたのは、差別、排除、屈辱でした。聖書の言葉が真理だと思ったのは自分の勘違いだったのか、落胆し戸惑いつつイザヤ書を読んでいた旅人は、手引きしてくれる存在を求めています。旅人の求めを受け止めつつ、フィリポは聖書から説きおこします。旅人が読んでいたイザヤ書 53 章に記された「苦難の僕」の姿は、イエス・キリストにおいて現実の出来事となったことを、フィリポは語りました。

フィリポが語った内容の詳細を使徒言行録は記しません。しかし使徒言行録の著者がルカであったことをふまえれば、フィリポはルカによる福音書が記すイエスの生涯をここで宦官に告げ知らせたことは想像に難くありません。イエスはその出生時から、社会的抑圧や政治的圧政にさらされ、命の危険と隣り合わせで地上に生まれました。それがルカによる福音書の告げているクリスマスです。

ローマ皇帝の命ずる人口調査により、イエスの母マリアは臨月にも関わらず長距離移動を余儀なくされました。しかもいよいよ産気づいたときには宿屋が満室で、家畜小屋にかろうじて場所を見出し、飼い葉桶をベビーベッド代わりにしてイエスさまは生まれました。その時から十字架の死に至るまで、人間の痛み苦しみ、社会における矛盾と弱者への抑圧を身に負い続ける苦難の僕として歩きました。そして宦官の読んでいたイザヤ書 53 章は「彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」(5 節)とも語っています。イザヤ書の語る神は、決してこの旅人の痛みや嘆きや苦悩を見捨てたままにされる方ではない。むしろ苦難の僕として、私たち人間の重荷と咎を引き受け、死をも引き受けて、私たちに命を・新しい人生を与えてくださる方である。そのことを知らされたとき、宦官はイエス・キリストを信じ洗礼を受けました。その後における彼の旅路は、以前のように失意で寂しい道ではなくなりました。39 節にあるように「喜びにあふれて旅を続けた」のです。この旅人は、クリスマスに私たちのところに来て、私たちの痛み悩み苦しみを担い、そのような形で私たちと共にいてくださる方を知り、それゆえに喜びました。そこに聖書の告げる平和、死から命へと私たちを向かわせる平和があります。

先月、宮城学院中学校の澁谷優子先生はじめ多くの先生方のご配慮により、中学1年生のロングホームルームの時間に、「聖書から考える平和」について共に学びました。その時、昨年のクリスマスに流れた一つのニュースを紹介しました。イエス・キリスト生誕の地ベツレヘムは、現在のパレスチナ自治区の中にあります。例年、クリスマスには世界中からキリスト教徒が押し寄せ、大きなクリスマスツリーを囲んでイエス

の誕生を祝います。けれども去年、ベツレヘムではクリスマスツリーの設置を取り止めました。それはガザの地の苦しみに連帯を示すためでした。ベツレヘムの教会の司祭は次のように語りました。「もしイエスさまがきょう生まれるとしたら、ガザで苦しむ子どもたちと一緒にがれきの中で生まれるでしょう。世界中がクリスマスを華やかに祝う中、パレスチナでのクリスマスの実情を知ってほしかった。」中学1年生の皆さんと一緒に平和について考え学びながら、この言葉について共に思いを巡らしました。そして宮城学院建学の精神を重ね合わせました。「福音主義キリスト教に基づいて学校教育を行い、人類の福祉と世界の平和に貢献する」ここに、私たち宮城学院共同体の土台があります。

本日の教職員礼拝から、来月の教職員礼拝をクリスマス礼拝としてささげるまでの期間、私たちの学院は多くのクリスマス行事を開催し、園児・生徒・学生・教職員、かかわる多くの方々と共にクリスマスを祝います。キャンパスが華やかに彩られる季節でもあります。その日々の中で、ベツレヘムの司祭が語った言葉を心に覚える私たちでありたいと願います。「もしイエスさまがきょう生まれるとしたら、ガザで苦しむ子どもたちと一緒にがれきの中で生まれるでしょう。世界中がクリスマスを華やかに祝う中、パレスチナでのクリスマスの実情を知ってほしかった。」ここにガザと私たちをつなぐ道があります。クリスマスの本当の深い喜びは、今日の聖書箇所における旅人がそうであったように、死と絶望から救い出し、私たちを命と希望へと生かす喜びとして与えられています。

(2024年11月6日)